

答 申 書

令和3年7月9日

養父市長 広瀬 栄 様

養父市振興計画審議会
会長 畑 正夫

養父市まちづくり計画(仮称)について(答申)

令和3年5月26日付け諮問第2号をもって諮問のあった養父市まちづくり計画(仮称)の策定に関する事項の調査及び審議について、下記のとおり答申します。

記

1. 計画全般について

[基本的視点について]

- 養父市ではこれまで他の自治体に先んじて中山間地の国家戦略特区で規制緩和に取り組むなど地域の持続可能性を高める努力を重ねてきた。それらの成果が地方創生の取組のなかでも成果を生み「住みたいまち」としての評価を受けている。こうした成果が認められるものの、人口の減少傾向は続いており厳しい状況にある。住みたいだけでなく、養父に住む市民が「住み続けたいまち」になることが重要である。市民が住み続けることに新たな意味を見いだせるようにまちづくりを進めることが大切である。
- そのためには、国家戦略特区に見られる挑戦的な取組みが、住民の主体的な活動により可能になる地域づくりが不可欠である。特に、若年人口が減少していくなかで、これからの養父を創る若者が、自然と歴史・文化に恵まれた養父の地で、多様な挑戦ができる環境づくりを進めることができる仕組みを整備することが大切である。多くの地域課題が養父だけでは完結的に解決できない現状において、養父市に関心を持ち「つながりを持ちたい」と考える人づくりを考えるべきである。

2. 基本構想について

[基本構想の具体性/具体化に向けて]

- 長期を展望する計画づくりは難しい。ましてや社会の変化の速度は加速している。そうしたなかで変化する社会に適応するには、これまでどおりの取組だけでは不十分である。その点を問うことが、今回の計画づくりの重要なポイントである。もちろん、いたずらに抽象的な将来像や絵空事は避けるべきである。ただ、現実と実現したい将来の姿の間には必ずギャップがある。大切なことはそのギャップを埋め、この計画を実感と共感を持てるものに高めることにある。まちづくり計画はそのための出発点である。

- まちづくりは市内の住民や企業、そして訪れる人と取り組むべきものであり、そのためには数々の実践を通して、この計画が「養父市の将来を創る計画」と考え、行動できるものへと育てる努力が大切である。特に、将来への多様な道筋を市民、企業、養父市とつながりを持つ人々とともに考えることが重要である。従来の総合計画から「まちづくり計画」へと転換したことの意味を認識して、今後の市政、まちづくりを進めて欲しい。そうすることで、まちづくりを次の段階に高めることができると考える。

[市民とともに道筋を描きゴールを考える必要性]

- まちの将来像の実現には年月を要し、困難を経験するだろう。しかし、困難に思えることも挑戦的な取組を許容する寛容さと、将来像の背景にある思いをメッセージとして伝えることが重要である。世代別、家族構成などに応じた発信も大切だが、実践的な活動のなかで将来像の実現に向けた多様な道筋を実感できる機会づくりも重要である。計画の出発点ではまちづくりに一般的に用いられるような既存目標などを用いることで理解を促すことができるが、実践行動へと段階を進めるにつれ養父らしいゴール・目標を市民とともに考え具体化していくことが大切である。
- まちづくりが行政だけのものではなく、市民、企業、養父とつながりを持つ者の協働の場であることを大切にすることが重要である。まちづくりの指針となるこの計画が自分事となるように、実現に向けた多様な活動を評価、改善できるような配慮が必要である。そのためには一律の数値目標だけでなく、将来像の実現に向けた活動や、めざす方向性につながる取組を行動レベルで評価ができる指標を提示することが大切である。策定後、まちづくり計画にふさわしい目標、指標の設定を検討いただきたい。
- 「スマートヴィレッジ」はまさにこうした取組のなかで具体化していくべきものだと考える。高い志のもとにめざす目標を掲げ、実現に向けた取組と著しく乖離しないように配慮しながら、市民の理解のもと進めていくことが重要である。

[新しい時代にふさわしい人口像と将来像の模索]

- 地方創生の取組では人口減少への対応が戦略の前提となっている。まちづくりにおける人口の重要性は暮らしの持続可能性に関わる。人口は豊かな養父暮らしを実現するための重要な基盤の一つであり、自然・歴史・文化に富む養父の暮らしの中で育まれてきた農業・畜産業や林業などの生業、そしてこの地で展開する様々な産業の持続可能性を支える重要な資源でもある。それだけに人口減少に対する対応を明確にしておくことが重要である。
- しかし、地方創生の取組を進めるなかでも減少傾向は続いている。また国全体でも同様である。現在の人口構造と減少傾向を見ると当分の間、減少傾向は継続すると想定されており、今は人口減少の速度を鈍化させることが大切である。その間に次なる手を打つことが求められる。企業立地や世代を問わない働く場づくり、移住者の取り込みなどを

進めてきたがまだ不十分である。まちづくりに関わる“つながり”を地域外も含めて創り出すことを検討すべき段階に来ている。

- デジタル社会の進展は多様な“つながりづくり”を可能にするだろう。この計画ではそこに可能性を見出そうとしているが、デジタルツールは手段に過ぎない。技術の効果的な活用が養父のまちをどのように変革できるのかを考え、その上で必要な人口像を今後明らかにすべきである。将来像の具体化を図るまでは、目安となる人口を掲げ、常住人口、交流人口、関係人口、そしてパートナーとしての市外で暮らす市民人口（仮に「つながり市民」と呼ぶ）を含む新たな人口像について議論を深めることが重要である。

3. 基本計画について

1) 市民がアクティブに自分らしく暮らすまち

- 高齢化が進む養父では、豊富な知識や経験を持つ高齢者がまちづくりの担い手として活躍することが期待される。そのためにも、元気な高齢者の活躍できる場作りを進めることや支援が必要になっても住み慣れた地域で暮らし続ける環境の整備が求められる。また、高齢者だけでなく障がい者をはじめとするすべての人が尊重され、自らの選択のもとにアクティブに暮らすことができる共生社会をめざす必要がある。そのためにも生涯にわたって健康に過ごすことができる環境の整備が急務である。
- また、将来に向けてアクティブな市民の暮らしを創造するために、地域への愛着を育む学びの機会の充実が重要な役割を果たすことを忘れてはならない。養父市ではこれまでから、子どもを対象にして学校、市民の協力のもとに地域の文化や自然に触れる機会が様々な形で提供されてきたが、改めて養父にしかない自然、文化に触れ、それらを守り生かす取組の重要性を認識すべきである。市民が高い感心を持てるように、子どもへの関わりを通して親世代をはじめ多世代を巻き込む工夫が重要である。
- 自分らしく暮らすことができるまちづくりは、養父市の特徴である「農ある暮らし」を踏まえた取組が必要である。そこには、健康や人とのつながり、心のふれあいがある。誰もが憧れる「魅力あるまち」の創造を図るべきである。移住者を含め、養父市につながりを持つ多様な人の多彩な暮らし方を支えるためには、魅力ある仕事や職場づくりが必要である。例えば、都市部の企業との協働によるテレワーク環境のなかで、養父市で実現可能な暮らしの姿を具体的に発信していくことが求められる。

2) 「地域」のつながりを力に、開かれたコミュニティがあるまち

- 養父市に住み続ける人、訪れる人、移り住みたいと考える人にとって、開かれたコミュニティをつくることは、養父市のなかでの新たな挑戦を可能にするとともに、まちの持続可能性を高めることにつながる。そのためには、情報や提供されるサービスの格差を生まないような多様な取組が必要である。また、外国人市民の増加も含め、共生社会の実現に向けた確かな取組が求められる。誰一人として取り残さないことが重要な視点

である。

- 開かれたコミュニティは移住者の受け入れを促進することに加え、若い人の考えをまちづくりに反映させ新たな挑戦を可能にする機会を作ることが大切である。また、福祉団体など地域内の様々な活動団体やコミュニティとのつながりは、農福連携に期待されるように新たな仕事や働く機会創出を通して、地域の活性化につながる可能性を持つ。さらに、林業に関心を持つ若い世代の力は林業の活性化に留まらず、脱炭素の取組やエネルギーの循環、災害の減少など、地域の持続可能性に生かすことが重要である。
- 養父市の豊かな自然資源を生かす観光業は、幅広い産業分野に及び総生産額に占める割合は大きい。こうした産業を発展させるためには持続可能性に配慮した取組が重要であるとともに、人々の暮らしの中で育まれてきた様々な資源を生かすことが大切である。例えば、古民家を宿泊施設として有効に活用することや、養蚕農家や明延鉦山など養父市固有の資源を生かす取組を行政、企業、市民が協力して進めることが望まれる。

3) 「公共」によって地域が豊かになるまち

- たとえば、人口減少への対応である仕事づくりの取組では、魅力ある仕事づくりに加えて、市民が様々な挑戦を行う機運を高め、それを多様な主体によって支え合う仕組みづくりなど、社会全体で力を合わせて必要な環境を整備することが重要である。そのなかで、これまで働く機会が少なかった人には機会を、子育て世代では安心して子どもを預け働ける場を、挑戦したい人には挑戦を可能にする仕組みをつくるなど、系統的で包括的な環境の構築・強化を通して新たな協働を創出することが重要である。
- デジタル技術はその限界に配慮しながら、効果的な活用を図ることが大切である。そうしたなかで、現在の「公共」が持つ境界を拡張することが重要である。たとえば、行政をはじめ暮らしに欠かせない様々なサービスを、市民を中心としたサービスに改善・改革するとともに、市民が様々な取組を自発的に発信するために活用できるように環境整備、活用方略の明確化が重要である。そのなかで、養父市とのつながりを持つ市外の住民との戦略的な関係性の構築が求められる。
- まちづくりの課題は現実に目の前にある課題から将来を見通した課題まで幅広い。高齢化が進むなかでは医療体制の充実や買い物支援など日常生活との関わりを重視した取組が喫緊の課題となる。その一方で人口減少が顕著に進んだ後の地域の姿を超長期的な視点で展望することも必要である。地域空間全体の適正な管理運営、地域資源の多面的機能を持続することによる災害に強いまちづくりなど予め検討を進めておくことが重要である。そうした地道な検討が基本構想の実現に向けた道筋を確かなものにする。

4) 横断的な視点

- 世界と地域が協働して取り組む国連「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」は、

行政だけでなく、企業や市民社会の主体がパートナーシップのもとに実現をめざすべき大きな課題である。現在の社会経済システムがもたらした様々な問題に対して社会、経済、環境のバランスをとり、持続可能な地域づくりを進めることが求められている。人口減少により養父市内で生じてきた諸課題に対しても社会、経済、環境のバランスに配慮した取組を展開することが重要である。

- こうした取組は養父市内だけでは完結しない。地域循環共生圏の発想に見られるように自立分散型の社会の構築に併せて都市などの広域的なネットワークとつなげて自然資源や生態系サービス、資金・人材などを効果的に活用することが重要である。基本構想にある「居空間」の発想はこうした取組そのものと考えることができる。その構築と運営にはデジタル技術を活用して市外に居る“つながり市民”とどのようにまちづくりを進めるべきか、必要な方略を考えることが不可欠である。

5) KPI（重要業績指標）について

- 基本計画に掲げられている KPI は、まちづくり計画がめざす超長期の取組、すなわち基本構想、基本計画との整合性を可能な限り図る必要がある。KPI は単なる事業や施策の業績を示すだけでなく、このまちづくり計画をもとに、養父市が市民とともに成し遂げようとする方向性を具体的に示すことにつながる。今後、この計画を具体化するための戦略事業が検討・実際されることになると思うが、そうした過程のなかで現在の KPI についても柔軟に見直しを行うことが大切である。

4. 計画の推進にあたって

- まちづくり計画の策定に併せて、新たな時代にふさわしい地域経営のあり方を次の4つの視点からの探索することが必要である。第1に養父市にふさわしい地域づくりのマネジメント手法の検討である。第2に市民、市内企業とともにまちづくりを実践的に展開するために必要な具体的な方向性を共有する機会の提供である。第3に市外で暮らす“つながり市民”との関係性を深め主体的に関わってもらえる取組の創出である。第4に前3つの取組を統合して進めるまちづくりを生み出すことである。
- 特に、共有機会の提供では、この計画のもとに市内の地区別のまちづくり計画を策定することが求められる。それぞれの地区が持つ文化や歴史、蓄積した社会資本を生かして、直面する課題に対応しまちづくりを進めるために、この計画が果たすべき役割を明確にしておくことが必要である。また、市民とともに考え行動する地区別の計画では必要な具体性を担保し、取組成果を適切に評価しながらアップデートできるように計画期間（例えば5年程度）などを検討し策定することが望ましい。
- また、策定単位とする「地区（または地域）」の捉え方も検討が必要である。地区を旧町単位で考えることや、自治協単位で考えることなどが考えられる。その際、緻密な計画づくりを求め、そこで市民が疲弊してしまわないように注意することが必要である。

市民や企業が捉えるまちづくりは様々であり、現時点では意識共有が十分に行われているとは言い難い。そのため、まずわかりやすいシンボルとなるような取組を核にする事業計画のようなものから着手することが肝要である。

5. 総括

- まちづくり計画は新たな挑戦的な取組として評価したい。将来像を描くだけでは現実に眼前にある問題が解決するわけではない。新たな取組にはそれにふさわしい仕組みと運用する職員や市民の意識改革が必要である。これからの実践活動のなかでしっかりと歩みを進めることが重要である。超長期の取組を仕組みや意識改革なしに展開することは“新しい酒を古い革袋に盛る”ことに等しい。養父市は変革の時代に適応するための第一歩を踏み出したと考えるべきだろう。これからの期待したい。

以上